

人文学の死

ガザのジェノサイドと近代500年の ヨーロッパの植民地主義

《公開セミナー》

日時:2月13日(火)18時~21時

会場:京都大学 吉田本部構内
総合研究4号館 1階 共1教室
オンライン併用

オンラインでの視聴をご希望の方は右のQRコードからお申し込みください。



私たちが今、目撃しているこの出来事は、いったい、何なのか。飢餓と大量殺戮を武器としたガザのパレスチナ人に対するジェノサイドが、世界注視のなか、100日以上が経過してもなおおとむことなく続いている。のみならず、国際社会を領導するグローバルノースの西側「民主主義」国家が、この人道に対する罪に異を唱えぬどころか、これに賛同し、応援し、あまつさえ武器の供与までおこない、さらには、人間性を否定されるパレスチナ人に対し人間として共感し、イスラエルの暴虐を非難し即時停戦を求める声に「反ユダヤ主義」の烙印を押し弾圧する。

私たちの目に今、虫けらのようにこの瞬間にも殺されているパレスチナ人の命を通して、否定しがたく映じているものとは、これまで民主主義や普遍的人権やヒューマニティを高らかに掲げてきたこれら西側自称「民主主義」国家とこの世界が、21世紀の今日、依然として、500年前から継続する植民地主義システムのもとにあるという事実である。人間であるということの意味、そのものが問われているこの事態を前にしながら、人文学（ヒューマニティーズ）に携わる者たちが、ガザで今、起きていることがあたかも自らの学問に関わりのない出来事であるかのように、これについて沈黙しているとすれば、それは、人文学に、そして、ヒューマニティーズのものに、自ら死を宣告しているに等しい。

今、ガザで起きているジェノサイドは、近代500年のヨーロッパによる植民地主義の歴史のなかに位置付けて考えることなくして、真に理解することはできない。そのような問題意識から、本セミナーは企画された。



岡 真理 (早稲田大学文学
学術院、現代アラブ文学)

基調講演1「ヨーロッパ問題
としてのパレスチナ問題」

藤原辰史 (京都大学人文
科学研究所、食と農の歴史、
ドイツ現代史)



基調講演2「ドイツ現代史研究の取り返しのつかない過ち——パレスチナ問題軽視の背景」

パネル・ディスカッション

司会進行:駒込武(京都大学教育学研究科、
教育と学問の歴史、台湾近現代史)



総合研究4号館(人文
科学研究所の南側)

京都大学吉田
本部構内

共催: : 科研費基盤研究(A)「トランスナショナル時代の人間と「祖国」の関係性をめぐる人文学的、領域横断的研究」(研究代表者: 岡真理) / 藤原辰史研究室 / 自由と平和のための京大有志の会(E-mail: info@kyotounivfreedom.com)